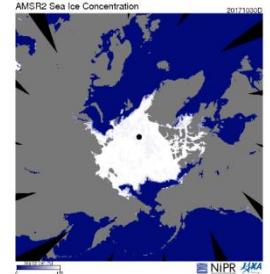


北極域に関する提言

北極域での科学的知見の活用 5つのアイ(i)から読み解く日本の役割



1 序 — 北極域での科学的知見活用に向けて

- 北極域は氷床・氷河、海氷が減少し、生態系や漁業活動への影響に直面。
- 石油・天然ガス・鉱物資源開発や北極海航路利活用の可能性。
- 日本の科学技術を活かした北極域での課題解決の方向性を提示。

2 北極域の現状認識

4つのiを手がかりに、北極域を知り、守り、活かす

- 国を越え (international)
多様な学域におよび (interdisciplinary)
様々な主体を包摂する (inclusive)
- 日本の独創性 (ingenuity)
多様な観測技術と独自の観測能力を活かして
得られたデータの蓄積、国際共同研究・観測拠点を活用し、知識の普及、人材発掘や新たな課題の早期把握に努力。

3 日本の強みを活かした科学技術外交 国際協力推進と 産学官によるイノベーション創出

- 日本の科学技術のセンサ技術やデータ活用は、イノベーション (innovation) 創出を促す協力関係構築の動力。
- イノベーション創出には、産業界による独創的な取組や科学界と産業界をまたぐ緊密な連携が不可欠。

4 今後の方向性 データ基軸の外交活動強化及び 研究基盤形成を通じた独創性発揮

- 日本は、高精度観測技術等を通じて得られたデータを蓄積・統合し、北極研究の基盤形成において中核をなすべく活動を継続すべき。
- 非北極圏国としての中立的な立場を活かして、日本は、信頼に足る客観的データを引続き諸国に提供することが望まれる。

5 結語 — 氷のたゆたう北極域を舞台に、多様な主体と学域を結び、未来を拓く

- 北極域が近年環境変動に直面する中で、課題への対処において科学的知見の活用は不可欠。
- 日本は、国際性 (international)、学際性 (interdisciplinary)、包摂性 (inclusive)、独創性 (ingenuity)、そしてイノベーション (innovation) の5つのiを基調として、北極域を舞台に多様な主体と学域を結び、未来を拓くべく、国際社会において他の諸国と協力しつつ、積極的役割を担うべき。

